

## 学校評価趣意書

令和3年4月1日  
尾道市立美木原小学校

## 1 学校内外の状況

## (1) 児童について

本校は、平成29年4月に尾道市北部4校が統合し、美木原小学校として開校し、5年目を迎える。児童数129名、学級数8学級（普通学級6、知的障害特別支援学級1、自閉症・情緒障害特別支援学級1）、校区は、西は三原市、東は福山市に隣接し、東西に広くバス通学者が約6割いる。

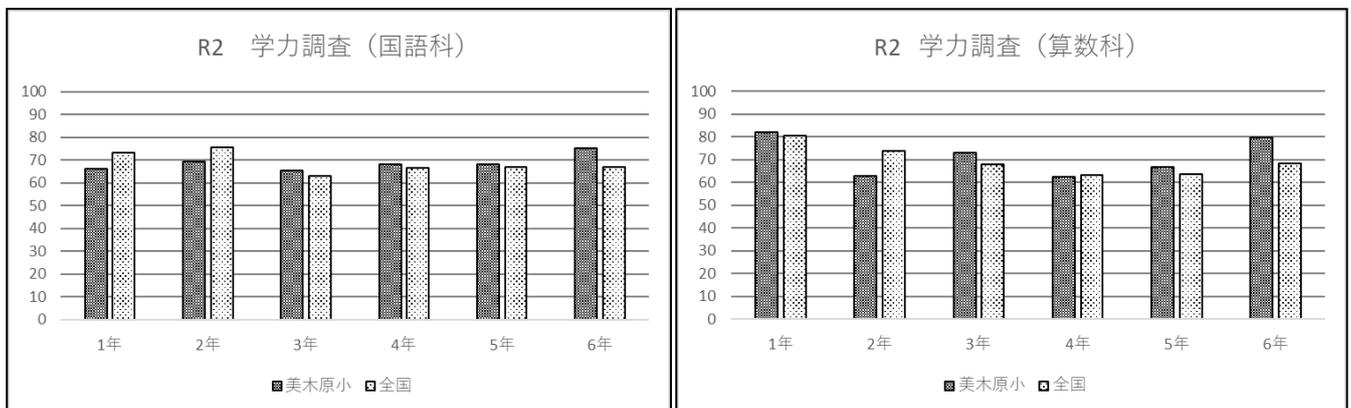
統合5年目を迎えた今は、児童の友達関係も深まり、落ち着いた学校風土を作ることが出来ている。また、統合経験者は第6学年のみとなり、4地域につながりを深めることを念頭に組織されていた育友会も、次年度からは、地域の枠組みを解体し、学年の輪を構築する組織編成とし、美木原小学校区としての団結が高まっている。

一昨年度より、「自分たちで創る」をテーマに、児童会活動を中心として、児童自らが学校生活を楽しくよりよくするための取組を企画、運営するというを始め、児童会と委員会がコラボレーションした生活指導や集会等が積極的に行われた。児童アンケートでは、児童の自己有用感は、7月：91.8%、12月：90.3%、3月：93.4%と、年間通して高い数値であり、取組の成果と言える。

学力については、「調べる」「まとめる」「伝える」をキーワードに授業改善に取り組み、学校図書館を活用し、図書資料や新聞を情報源や発信方法として活用することも継続して取り組んだ。国語科においては、事前に初見の教材文で児童の実態を把握した。すると、当該学年までに習得しておくべき、説明文の読み方が多くの児童に定着していない事実が分かった。そこで、前学年の課題となっている内容を取り入れながら、当該学年の指導を行った。指導後には、活用テストで汎用力を評価した。単元末テストでは期待点を通過するものの、初見の活用テストでは、文章の内容を正しく読み取ることに未だ課題があり、昨年度の平均通貨率は79.9%で、目標値の80%にわずかに及ばなかった。

一方、一昨年度から取り入れている思考ツールについては、より使いやすい6つのツールに精選し、全学年で活用できるように取り組んできた。国語科だけでなく、社会科、理科、生活科、道徳など、様々な教科で活用し、考える手法としてどの学年でも取組が進んできた。児童アンケートによる情報活用力の自己評価では、調べる力①：93.0%、調べる力②：89.3%、まとめる力：87.9%、伝える力：79.3%という結果であった。

昨年度12月実施の学力調査の結果は以下のとおりである。



学力調査の結果から、国語科においては低学年に課題が大きい。3年生以上については、昨年度よりも学力が向上している。低学年は、長文を読むことに慣れていないため、最後まで解答できなかった児童が多い。また、領域では、低学年では、「読むこと」「書くこと」の両方に、全校的には、最終問題の「条件に沿って書くこと」についての課題が大きい。「読むこと」については、文章の大体の内容や構成を理解することができていないため、物語文については、場面の様子や登場人物の心情の変化、説明文においては、要旨や主張を正確に読み取ることができていない。「書くこと」については、書くべき内容が十分でなかったり、書いているうちに条件からそれたりする傾向が見られる。算数については、昨年度と比較すると、中学年以上の学力が向上した。低学年においては、計算領域に課題が大きい。中学年以上は、統合加配によるTT指導で、徐々に学力が向上している。今後は低学年にもTT指導を広げ、基礎学力の定着を図る必要がある。

これらのことから、国語科の指導についての以下のように課題を整理した。

○文章全体を大きく捉えて読む指導ができていない。

- 言葉と言葉、文と文、段落と段落のつながりを意識して読んだり、書いたりする指導ができていない。
- 日常的な読書活動や新聞の活用が、児童の読む力や書く力に十分反映されていない。

## (2) 教育活動

昨年度の研究においては、つけたい資質・能力を、「言語力」「情報活用力」とし、「調べる」「まとめる」「伝える」学習を進める有効な手段として、学校図書館の利活用、NIE、思考ツールの3つを授業に適宜取り込み、授業改善を行ってきた。

今年度は、昨年度の課題を踏まえ、研究主題を「考える、伝え合う力を育成する授業づくり」と設定し、筑波大学附属小学校の青木伸生先生の、文章全体を丸ごと捉える読み方「フレームリーディング」を指導法として取り入れ、学年に応じて、文章構成をとらえる力を育成していきたい。その上で、自分の考えを人との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えを持ち、まとめ、広げることができるように授業改善に臨みたい。

また、今年度も、学習を支える学校生活を自分たちで創る「生活を創る」取組を継続し、児童の主体的な学びを育てていく。

## (3) 教員集団

本校の教職員集団は、年齢や経験のバランスがとれている。低・中・高学年のブロックで、若手教職員と指導教員の組み合わせで担任を編成できている。併せて、統合支援等の非常勤等の配置があり、学校規模から考えて教職員数が多い。どの教職員も勤勉で、研究熱心であり、協働的に業務をすることができることが強みである。「自分たちで創る」という学校づくりの基本は共有化されている。

今年度も教育活動を教職員一人一人が十分理解して実践できるように、年度初めに、内容と方法を共有化し、指導の学年差が生じないように留意する。

## (4) 教育環境

「尾道みらいプラン2・読書活動推進指定校」の指定を受け、学校図書館環境や新聞購読の予算化もされているため、今年度もこれまで培ってきた読書活動やNIEの取組を土台として、学力向上の取組を進めることができる環境である。また、昨年度を以て終了した学力向上推進地域の取組は継続し、美木中・三成小と学習指導や生徒指導の教育方針を揃えて指導を行う。今年度は、小中連携加配が措置され、美木中学校の外国語教師が、それぞれの6年生に週2時間の外国語科の指導を行うこととなった。このことにより、小中連携が継続して行われ、児童の外国語の理解が進むだけでなく、中学校との連携の強化や中1ギャップの解消にもつながると考える。

## 2 ミッション

小中連携を核とした確かな学力定着の取組の継続と発展

## 3 ビジョン

- 児童の主体性を育み、未来につながる学力をつける学校
- 幼・小・中の連携による学びの連続性を大切にしている学校
- 家庭・地域とともに、子供の育ちを考える学校

## 4 重点課題

つけたい資質・能力を学習・生活の基盤となる「言語力」「情報活用力」とし、次の2点の姿を目指して、教育活動を推進する。

◆自ら課題を発見し、探究的に学ぶ子供 ◆自分の考えを自分の言葉で発信する子供

重点課題の取組として、生きる力の基盤となる「豊かな言葉と心を育む」読書活動を教育活動の土台として、学習と生活の両面から児童の主体性を育てる。

「学びを創る」・・・「考える、伝え合う」力を育成する授業改善

「生活を創る」・・・児童自らが学校生活を創る特別活動の充実－児童会活動・学級活動－